１１月１０日期間集会

〇陸上競技・駅伝部全国大会に出場

　１０月３１日（土）に陸上競技・駅伝部が、茨城県大会で県の最高記録を２３秒更新する２時間４分１９秒の好成績で優勝しました。そして茨城県代表として第７７回全国高校駅伝に出場し、都大路を走ります。昨年の終業式では駅伝部は京都入りしていて、学校での集会で壮行会や表彰することができませんでしたが、今回はここで、後ほど表彰をします。そして、１２月２０日（日）に県の代表として高校駅伝を走ります。応援団などは現地に行きますが、行けない人はテレビで応援しましょう。

〇１１月に入った

　１１月７日（土）は立冬でした。いよいよ冬になります。１１月は霜月と言います。朝晩の冷え込みが厳しくなり、霜が降り始める頃であることに由来します。「霜降月」が短くなったという説もあります。日が短くなり、燈火親しむの候になりました。昨日１１月９日で読書週間は終わりました。今年の標語は「静かだけど、冒険中。」です。ミステリか、冒険物語なのでしょう。静かに本をワクワクしながら読書していることを想定しているのでしょう。

　ところで、早送り、倍速で映画やビデオを見るといった風潮があるようですが、画面の１つ１つに制作者の様々な思いが込められていますから、あらすじだけを追うだけの映画鑑賞ではなく、「神は細部に宿る」と言いますから秋の夜長には、本を読んだり、映画をじっくり見るのもいいかもしれません。

〇２００１年宇宙の旅

　今から約６０年前の１９６８（昭和４３）年に公開されたスタンリー＝キューブリック監督のイギリス・アメリカのＳＦ映画「２００１年宇宙の旅　2001: A Space Odyssey」があります。実存主義、人類の進化、科学技術、人工知能、地球外生命体の可能性などをテーマに、未知の存在モノリスを発見した人類が、人工意識を持つコンピュータＨＡＬと共に木星に向かう航路で勃発した事件を描いたＳＦサスペンス映画です。世界各国から様々な評価を受けていて、終末論や人類の進化、異星知性体への応答など、多岐にわたります。 従来の映画や物語の手法を避け、台詞の無い音楽だけの長いシーンがあります。科学的に正確な惑星間宇宙航行の描写を先駆的な特殊効果で映像化しつつ、ストーリーは曖昧な印象を与えています。

　公開当時の１９６８年における世界の年間興行収入で１位を記録し、現代では映画史におけるＳＦ映画の古典として認識されており、日本では当時の文部省が「特選」に指定している唯一のＳＦ映画です。１９９１年にはアメリカ合衆国議会図書館によって「文化的、歴史的、美学的に重要」とみなされ、アメリカ国立フィルム登録簿に保存されることになりました。映画史の中で影響力のある映画作品の一つとして広く知られています。

　私はこの映画を大学生のときから何回か名画座などで見ました。何回見てもよくわからない映画ですが、不思議な魅力があります。

　なぜ、今この映画の話をするのかというと、映画のストーリーの後半で、宇宙船ディスカバリー号が木星探検に向かいます。史上最高の人工知能コンピュータＨＡＬが宇宙船の運行から乗組員の生活まで全てをコントロールしている設定です。乗組員は、「やあ、ＨＡＬ、元気かい」などと声をかけ、ＨＡＬと会話を続けます。そして、「ＨＡＬ、今日の食事は何だい」と聞くと、すぐに食事が出てきます。音声入力で食事が出てくるのです。まさに現在のＡＩそのものです。

　乗組員の２人がＨＡＬの動作や判断の異常を疑い、２人がＨＡＬに聞こえないように会話しているところを、ＨＡＬは映像解析で２人の口の動きで会話の内容を読み取り、ＨＡＬの性能が疑われていることを知り、乗組員を殺害しようとします。つまり、コンピュータであるＨＡＬが映像認識したうえ、感情や意思を持ってしまいます。まず、人工冬眠中だった科学者３人の生命維持装置を止め殺害します。その後、ＨＡＬは修理のため宇宙船外に出た２人の乗組員を船内に戻れないようにするなど

します。唯一生き残ったボーマン船長は、ＨＡＬの思考部を停止させるため、ユニットを取り外していくと、ＨＡＬは助命嘆願を繰り返しますが、次第に知能を失い、退行して遂には「デイジー」の歌を歌い始め、録音テープが失速するようにして止まります。

映画のタイトルの意味は２００１年、つまり２１世紀最初には宇宙の旅ができているという設定ですが、２１世紀になって四半世紀、四分の一が過ぎて今年で２６年ですが、まだ現実は追いついてはいません。とはいえ、このコンピュータＨＡＬの機能・働きは、６０年近くたって現在のＡＩが実現するようになってきたということでしょう。まだＡＩに感情や意思はありません。しかし、ＡＩが人間の能力を超える日もそう遠くではないような気がします。そのことの危険性について、国際的にも警鐘が鳴らされています。

ところで、経済協力開発機構（ＯＥＣＤ）が今年９月初めに発表した「2025 年国際学力調査（ＰＩＳＡ）」では、日本がＡＩなどを活用した教育について、調査対象国の中で最下位水準にあるということです。今回の調査で、日本は「授業でＡＩが生成した情報の質を評価する方法を学んだ」という回答が 31.2%で、最も低い数値を示した一方、「学校の課題でＡＩチャットボットをほとんど/全く利用しない」という質問には、39%に達する高い回答率を示しました。これはＯＥＣＤ平均（14%）の 3 倍近い数値でした。ＯＥＣＤは「ＡＩは学習を強化する手段となり得る」としつつも、「子どもたちの集中力や努力、理解をＡＩが代わって行ってはならない」と指摘しています。また、世界的な読解力の低下要因として、本の読書が減り、ソーシャルメディア（ＳＮＳ）などでざっと目を通す「デジタルリーディング」が増えた点が気になります。しかし、今後、ＡＩをはじめとしたデジタルツールの活用がさらに進む見通しです。「ツールに頼って学ぶ」のではなく「ツールを使って学ぶ」こと、学び方を自分で考える習慣づけが大切になります。

余計な話を１つ。このコンピュータＨＡＬは、当時の世界的なコンピュータメーカーのパロディです。アルファベットのＨ．Ａ．Ｌ．を後ろに１字ずつずらすと、ＩＢＭになります。

〇アメリカファースト？について

今年の７月２日、サッカーワールドカップ決勝トーナメント１回戦でレッドカードを受け退場になったアメリカ代表のバログン選手の件です。次の試合は出場停止の決まりでしたが、トランプ大統領がＦＩＦＡの会長に電話した後、ＦＩＦＡがそれを覆し、次のベルギー戦への出場を認めました。トランプ大統領の意向や、ＦＩＦＡの対応、判断について批判的なニュースがありました。

バログン選手の両親はナイジェリア出身でイギリス在住です。バログン選手もイギリスでサッカー選手のキャリアを積みましたが、なぜアメリカ代表になったのでしょうか？

アメリカのスポーツ専門局ＥＳＰＮのサイトによれば､バログン選手のお母さんが妊娠７カ月の時、休暇でアメリカを訪れていた際、航空会社から妊娠中、身重であるから飛行機には乗れないとイギリスへの帰国便への搭乗を拒否されたのだそうです。このためお母さんは、ニューヨークの親類に身を寄せ、バログン選手はニューヨークで生まれました。バログン選手のお母さんは飛行機に乗れるようになると、赤ちゃんのバログン選手を連れてすぐイギリスに帰国したといいます。バログン選手がアメリカの代表になれたのはアメリカ、ニューヨークで生まれたからです。アメリカでは、国内で生まれた子どもには、ほぼ無条件でアメリカの市民権を与える「出生地主義」を取っています。

しかし、トランプ大統領は昨年の就任直後、この一時的な滞在者・外国人が出産するケースでは、今後生まれた子どもにはアメリカの市民権を認めないなど「出生地主義」を大幅に制限する大統領令を発しました。

この大統領令については、ワールドカップ開催中の６月３０日に、アメリカ連邦最高裁が､「この大統領令は無効」との判決を下しました。退場の判定にいきりたったトランプ大統領はバログン選手を「アメリカ代表チーム最高の選手」と評していましたが、大統領はバログン選手の出生の事情を理解していたのでしょうか？一時的な感情的、感覚的な判断が、人の運命や事案を左右するのは如何なものかという教訓にしたいものです。